

# かきさぎ 通信 第33号

2015年4月10日 発行

どなたでもいつの会でも参加できます

森三郎刈谷市民の会

「森三郎の作品を読む会」

二〇一五年三月の「森三郎の作品を読む会」では、『赤い鳥』昭和8年8月号初出の三作品を読みました。「フィルム」・「針」・「ひとりつ子」

『赤い鳥』昭和8年8月号には、作者名の違う三作品が載っています。そのうち、「フィルム」と「針」について、それぞれの内容を比較してみると面白い特徴が見られます。

主人公	三也・五年生	葉子・四年生
発端	文房具屋で見つけた活動のフィルム (パラパラ)	新しい学科・裁縫 新しく揃えた赤い漆で塗った裁縫箱
相手	正宗君(組中で一番乱暴者・お金づかいが荒い・一円札)	松江(隣の席・よくけんか・古い黒の裁縫箱)
事件1	正宗君がフィルムを買ってくれる	松江はつつけんどん・針で指をつき、痛そう・葉子 くすくす笑う
事件2	中川君の一円札が紛失・先生「盗みは、おそろしいこと」	葉子の針が一本なくなる・罰当番の掃除
事件の解決	正宗君が泣き出す、三也は不安、何事も無い	松江「私の布にささっていた。ごめんなさい」 新しい裁縫箱を買う
終末	フィルムは弟に。いつそ自分で買えばよかったのに	初めてふれる優しい口 のききかたを聞いて、 「帰ったらあそぼうね。」

二作品とも、子どもが成長していく中で出会う、新しいことへの期待や誘惑、友達に対するねたましき、不安や後悔を描いている点で共通しています。読者の子どもたちは、どちらの側になるにせよ、自分も似たような体験をしているかもしれない。そういう体験を客観視させてくれるきっかけになったのではないかと、想像します。

「ひとりつ子」は、「谷井綱之」の名義になっています。この作品は『赤い鳥』復刻版解説・執筆索引(日本近代文学館)には「森三郎」作品にはなっていない。しかし、酒井晶代先生(愛知淑徳大学・教授)から、

「ひとりつ子」(谷井綱之名義)は森三郎さんの作品であることを、修士論文執筆の際にご本人から確認済みです。復刻版刊行時に思い出せるだけの筆名を挙げられたそうですが、失念していたものもあるご様子でした。

と、伺っています。(二〇一四・六・二)

「ひとりつ子」の主人公・慶一は、『赤い鳥』昭和8年3月号初出の「だだつ子」(森三郎童話選集 夜長物語)所収)に出てくる、呉服屋「井筒屋」の一人っ子・良さんという少年と設定がよく似ています。慶一の家は呉服屋ですし、「学校では人一倍よわむしで、人とけんかも出来ないくせに、家へかへると、店のものなぞにぼん／＼食つてかゝつたり、おどかしたりして一人でおぼりちらしてゐました。」という点も酷似しています。「だだつ子」は、いつも我慢する側の、店の番頭の息子・正男を主人公にしましたが、今度は、店の一人息子の立場から描いた作品といえます。(「だだつ子」については、「かきさぎ通信 第27号」で報告しました。)

また、「ぞうりかくし」の童歌が出てきて、これも森三郎さんがよく使う大事な小道具ですから、確かに森三郎作品の香りがします。

## 次回予定 5月8日(金) 午後1時〜3時

『赤い鳥』昭和8年9月号初出作品・『森三郎童話選集 夜長物語』所収  
「副級長」・西瓜